

Title	字幕翻訳で失われる要素：言語教育との関わりを考える
Sub Title	
Author	保坂, 敏子(Hosaka, Toshiko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2016
Jtitle	日本語と日本語教育 No.44 (2016. 3) ,p.41- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20160300-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

字幕翻訳で失われる要素

—言語教育との関わりを考える—

保 坂 敏 子

1. はじめに

社会のグローバル化や情報通信技術（Information and Communication Technology:ICT）の進展に伴い、情報や文化的リソースへのアクセスが容易になり、文化の越境と混淆が進んでいる。言語の教育と学習を取り巻く環境が急速に変化する中、「文化¹⁾」が言語学習のきっかけや動機づけとなり、自主的に文化的リソースとして親しんだり、学習リソースとして利用したりする学習者が多く見受けられるようになった。日本に来て日本語・日本文化を学ぶ留学生の中には、来日前に字幕翻訳を利用しながら一人で日本の映画やTVドラマ、アニメ²⁾などの映像作品に数多く触れてくる者も少なくない。教室外で自主的に映像作品に親しみ、日本語を学んで来る留学生に対し、教室で言語教師は何ができるのだろうか。

このような問題意識のもと、字幕翻訳を利用した自律的学習において学習者が一人では学べないこととは何かという視点から、翻訳研究を枠組みに、日本映画の日本語のセリフとその英語の字幕翻訳を比較分析した。本稿では、まず、翻訳研究の流れと字幕翻訳の特徴、字幕翻訳ストラテジーを整理し、次に、翻訳理論を枠組みに行った分析の結果を報告する。さらに、その結果を基に、教室で映画を使ってどのような言語教育ができるかについて、字幕翻訳と言語教育との関わりについて触れながら考察を行う。本研究の目的は、学習者が一人ではできない学びを教室で実現することを目標に、字幕翻訳で失われる要素を明らかにすることある。

2. 翻訳研究と字幕翻訳

2-1 翻訳研究の流れ

翻訳とは、長らく文字テキストを別の言語で置き換える行為と捉えられてきた。文字から文字へと水平転移を行う言語間翻訳では、原文に忠実に訳すことが重視され、翻訳研究では「等価」という言葉で議論されてきた。しかし、20世紀後半から翻訳を取り巻く状況が大きく変化し、文字テキスト間の翻訳だけでなく、音声テキストから文字テキストへ、文字テキストから映像テキストへなどメディアを越えた翻訳が行われるようになった。また、商業や娯楽など翻訳するテキストの内容が多岐にわたるようになり、翻訳目的も多様化が進んだ。これを受け、翻訳研究は「原文志向」から「訳文志向」、「等価志向」から「機能志向」へと焦点が移り、翻訳は、言語のコード変換から異文化間コミュニケーション行為そのものと捉えられるようになった（藤濤 2007）。翻訳研究において、これは、言語学的アプローチから機能主義的アプローチへのパラダイム転換と呼ばれる（ベーカー・サルダーニャ編、藤濤監訳 2013）。

機能主義的アプローチでは、翻訳を「目的を持った異文化間の行為」と定義し、翻訳行為で最も重要なのは翻訳の目的であり、翻訳の目的が訳文に大きな影響を及ぼすとされる。起点テキスト（原文）の文化と目標テキスト（翻訳文）の文化の間で行われる異文化間コミュニケーションの中では、著者の意図や受け手の立場が勘案されて、目標テキストの言語形式はそれが果たすべき目的に沿って決定される。また、起点テキストと目標テキストの目的が異なることも認められている（ピム著、武田訳 2010）。

2-2 字幕翻訳の特徴

翻訳研究において、字幕翻訳は視聴覚翻訳の一つで、起点テキストの音声セリフが文字へと変更するモード間の翻訳、「異種記号タイプ」に位置づけられる。また、字幕翻訳は、原作のセリフの音声を視聴者の言語に翻訳

する「言語間字幕」と、聴覚障害者用の字幕などのようにオリジナルの音声と同じ言語で文字に移す「言語内字幕」に分けられる。どちらも言語教育の学習リソースとして利用可能である。本稿では、前者の「言語間字幕」に限定して論を進め、それを指す用語として「字幕翻訳」を使用する。

字幕翻訳は、元の音声と同時に映像画面に提示する必要がある。一般的に話すスピードの方が読むスピードより速いため、技術的・物理的な制約を受けることになる。英語字幕と日本語字幕の場合の制約は以下の通りである（バイカー & サルダーニャ編、藤濤監訳 2013； 染谷 2009）。

- ①空間的制約 ➡ （英）1 行につき 35 文字までで、最大 2 行まで。
（日）1 行につき 13 文字までで、最大 2 行まで。
- ②時間的制約 ➡ （英）1 秒間に読める文字は 12 文字
（日）1 秒間に読める文字は 4 文字

字幕翻訳は文字数に制限があるため、通常元のセリフの 43% が失われることが実証的に示されている（de Linde & Kay 1999、バイカー & サルダーニャ編、藤濤監訳 2013、p24）。藤濤（2007）は、情報量を縮小するために、字幕翻訳では意味情報の取捨選択と文体情報の平板化が求められることを指摘した上で、パラ言語的要素については、文化的差異を同化的に処理する余地があるとしている。

このような情報量の縮小という特徴から、字幕翻訳は原文至上主義の立場から批判されることがあったようである。しかし、映画の字幕翻訳の目的は、観客にわかる字幕を作るということであり、原文を正確に翻訳することを目的としているわけではない（清水・戸田・上野、1992）。機能主義的アプローチから見ると、字幕翻訳は物理的な制約のもとに、目的をもって情報が削減された機能主義的な翻訳テキストだと言える。

2-3 字幕翻訳のストラテジー

翻訳者が翻訳行為を行う場合の訳出ストラテジーの研究は盛んに行われ

表1 字幕翻訳の訳出ストラテジー論

Gottlieb (1992)		河原 (2011)
①拡張 (Expansion)	⑥変換 (Dislocation)	①命題保持訳
②言い換え (Paraphrase)	⑦圧縮 (Condensation)	②削除
③転移 (Transfer)	⑧簡素化 (Decimation)	③言い換え
④模倣 (Imitation)	⑨削除 (Deletion)	④補足
⑤複写 (Transcription)	⑩放棄 (Resignatio)	

てきた。字幕翻訳分野における代表的な理論としては Gottlieb (1992) が挙げられる。Gottlieb (1992) はメディア固有の厳しい制約と照らして、字幕翻訳ストラテジーを 10 種類に分類した (表 1)。一方、河原 (2011) は、ニュースの字幕翻訳の事例分析を通して、英語の原文と日本語字幕翻訳が全て対応付けできる 4 つの字幕翻訳訳出ストラテジーを提案している。

これらの訳出ストラテジーの中で起点テキストの情報の削除・削減に関わるものを検討する。情報の全てが削除されるのは、Gottlieb (1992) の⑨「削除」(セリフの全体の削除)と河原 (2011) の②「削除」である。情報の一部削除と削減に関わるのは、Gottlieb (1992) では②「言い換え」(同じ表現が出来ない時、起点の言語をゆがめないように言い換える)、⑥「変換」(内容より音楽的、視覚的効果を優先し、対象言語の文化に合わせて調整する)、⑦「圧縮」(できるだけ目立たないようにテキストの内容を短縮にする。最も典型的なもの)、⑧「簡素化」(「圧縮」の極端な形。話すスピードが早いなどの理由で、重要な要素でも削除される可能性がある)、⑩「放棄」(翻訳する方法が全くないが、意味的には重要なものを全く別の言葉で言い換える)となるが、河原 (2011) の②「言い換え」はこれを全て包摂するものと考えられる。

このような字幕翻訳ストラテジーを枠組みにした研究は、文化的要素がどのように訳出されたかを検討するもの (河原 2011) や、同じ起点テキストから翻訳された言語の異なる目標テキストの間に文化認識によるズレが

あるかを分析したもの（小谷 2004）など、訳出された文化的要素に着目するものは見られる。しかし、翻訳によって失われた要素を検討する研究はまだ見当たらない。また、文学を対象に翻訳で失われるものを認知言語学の一環として考察した研究はあるが（牧野 2014）、映像作品の字幕翻訳を対象にしたものは管見の限り見当たらない。字幕の訳出ストラテジーで削除される要素は、字幕で映像作品に親しむ受け手には非明示的な情報であり、それは、学習者が一人では学べない要素だと言える。本研究では、学習者に非明示的な部分を明示化するために、Gottlieb（1992）の分類を鑑みながら、河原（2011）の「削除」「言い換え」の訳出ストラテジーが施された部分について分析を試みる。

3. 研究の方法

3-1 研究課題

本研究では、字幕翻訳を使って自律的に映像作品に親しんでいる学習者に対し、学習者が一人ではできない言語と文化の学びを教室で実現することを目指して、以下の2点を研究課題として設定する。

- ① 字幕翻訳ストラテジーを枠組みに、字幕翻訳でどのような言語的要素が失われたかを明らかにする。
- ② 字幕翻訳で言語要素が失われたことにより、どのような社会・文化的要素が落とされたかを明らかにする。

3-2 分析の対象

本研究で分析の対象としたのは、織田裕二主演の大ヒット刑事ドラマを映画化した『踊る大捜査線 The Movie』（フジテレビジョン 2000）で、シリーズの第一弾にあたる。映画では、現場の若手刑事青島（織田裕二）と警察官僚（柳葉敏郎）との友情を軸に、本庁と所轄署、キャリアとノンキャリアの対立が描かれているが、これまでになかった視点が人気を集め

た理由だと言われている。この映画を選んだのは、市販の DVD に日本語字幕と英語字幕の両方が付いており、公式の信頼性のある翻訳資料と見做すことができるからである。筆者は長年この作品を上級前期レベルの「音声言語理解」科目で使用してきたが、受講者から言語と文化の学習リソースとして高く支持されており、筆者自身がセリフを発話の意図に至るまで検討していたことも、この作品を選択した理由として挙げられる。

3-3 分析の方法

分析作業には、日本語のセリフを文字化した資料を準備し、DVD で英語字幕付き映画を視聴しながら、以下の手順で分析を進めた。

- ① PC に日本語のセリフを表示する。英語字幕付き映像を見ながら、日本語のセリフと英語字幕翻訳を比較し、英語字幕で情報が削除・削減された部分を特定する。特定した部分をマーカーで表示し、失われた要素・情報を記述したアノテーションをつける。
- ②①のアノテーションについて、河原（2011）を参考に、Baker（2011）の5つの等価の枠組み（表2）に沿って分析を行う。
- ③②の分析結果から、言語的要素が削除されたことにより失われた社会・文化的要素を検討する。

分析を行ったのは、筆者と英語教育を専門に学んだ英語が堪能な日本語

表2 Baker（2011）の5つの等価の枠組み

1. equivalence at word level	（語レベル）
2. equivalence above word level	（フレーズレベル）
3. grammatical equivalence	（文法レベル）
4. textual equivalence:	（テクストレベル）
5. pragmatic equivalence	（語用論レベル）

母語話者の2名である。別々に作業を行い、2名の意見が一致したところを翻訳で失われ部分と認定した。

4. 分析の結果

4-1 日本語のセリフと英語翻訳の分析例

削除された部分にアノテーションをつけた3-3の手順①の分析例を示す。分析例1は、映画の冒頭の場面である。湾岸署の署長と捜査1課課長、部下の青島刑事（主人公）がゴルフ接待のために警視庁の副総監を自宅まで迎えに行ったシーンである。

【分析例1】 □は翻訳で削除・削減された部分、➡はアノテーション

<副総監の家の前>

無線： 本部から①警邏中の各局、②警邏中の各局、港区③朝霧台2丁目5番地4付近の路上で④駐車中の二輪車が⑤突然火を吹いたとの110番通報。消防は現着であるが、⑥付近の交通整備を要請された。

(英語字幕翻訳)

H.Q. to all units / Minato-ward, roadside alert...

Calling for a motorbike fire /

Fire department present but traffic control needed...

➡①③④⑥削除(名詞修飾) ②削除(繰り返し)

⑤削除(副詞)

梶田課長： どうだ？

青島： まだ□っすねえ。 *Not yet.*

➡削除(くだけた表現・敬体)

梶田課長： でてきたら、わかってるね。

青島： 来ました。

梶田課長： 間違いないか。

青島： 本人です。

梶田課長： まだだ。

梶田課長： よし、今だ！

青島： 湾岸署□の者です。 *Beyside P.D.* ➡削除(不要な表現)

男（副総監）： 湾岸署？
 神田署長： ①お待ちしました、②副 総監。

Good morning, Comissionar

➡ ①言い換え（敬語表現）、②削除（役職名の一部）

最初の「無線」は、警視庁本部からの業務連絡で、情報量も多く、話すスピードも速い。ここで重要なのは「港区」という情報で、これから登場する副総監の自宅の場所であり、映画の舞台となる湾岸署が管轄する地域を示しているが、翻訳でも保持されている。削除されているのは、物語の筋に関係ない名詞修飾節や副詞、同じ言葉が繰り返されている部分である。次に、「まだっすね」というセリフを見ると、翻訳“*Not yet.*”には「まだ」という命題は保持されているが、「～っすね」に関する情報が削除されている。「～っす」は「です」の音変化した形式である。音変化によりくだけた表現となっているが、「です」の敬体は崩していない。これは、話し相手が上司だからであろうが、敬体を保持ながら音を変化させることで、その上司との関係の近さを示すとともに、話者である青島刑事の気さくな性格を暗示しているものと思われる。「～っすね」の削除により、このセリフから読み取れる以上のような言語的・文化的情報が失われたことになる。最後のセリフの「副総監」という呼びかけは、役職名から「副」という部分が削除されている。話の流れにあまり関わらない情報として削除されたのであろう。この映画では、呼びかける時に使われる「署長」「課長」「係長」「係長代理」「先輩」などの役職名が頻繁に使用されるが全編を通して字幕翻訳から削除されることが多かった。

分析例 2 は分析例 1 に続く場面で、湾岸署の 3 人が副総監と自宅前で対面するシーンである。青島刑事だけでなく、所轄署の署長や課長も敬語表現を多用することから、警視庁副総監の地位の高さを感じさせている。

【分析例 2】

＜副総監の家の前＞	
青島	： お迎えにあがりました。 <i>We're here to pick you up.</i> ➡ 言い換え（敬語表現）
袴田課長	： さあ、ゴルフへ参りましょう。 <i>And take you to the golf course.</i> ➡ 言い換え（敬語表現）
神田署長	： タカヒコ [スリー] カントリークラブまでお送りいたします。 <i>"Takahiko Country Club." / Allow us to escort you.</i> ➡ 削除（不要な情報）
青島	： ①私（わたくし）、本日の運転手を②やらせていただきます 青島と… <i>I'm your driver today, Aoshima...</i> ➡ ①②言い換え（敬語表現）
袴田課長	： ①青島君、②ご挨拶なんか後でいいから バック ③お持ちして。 <i>Forgot that, get his bag.</i> ➡ ①削除（呼びかけ） ②言い換え（敬語表現・不要な情報） ③言い換え（敬語表現）
神田署長	： 君も持ってよ。 ➡ 全削除
青島	： お預かりします。 <i>Let me help you.</i> ➡ 削除（敬語）
神田署長	： さあ、どうぞ。 ➡ 全削除
袴田課長	： いいお天気で ようございましたね。 <i>A Lovely day for it.</i> ➡ 削除（敬語・敬体）
青島	： こちらです。 ➡ 全削除
袴田課長	： こちらでございます。 <i>This way, please.</i> ➡ 削除（敬語・敬体）

青島刑事が話す最初のセリフ「お迎えにあがりました」は、「言い換え」のストラテジーで原文の意味に対応した翻訳となっている。ただ、起点テキストの「お迎え」、特に「あがる」に込められた敬意の含意は、“We”が“I”より丁寧さを示すとしても十分だとは思われない。この場面では他にも「参りましょう」「わたくし」「ようございましたね」など丁寧度の高い表現と敬意や丁寧さの含意が削除されている。また、ここでも「青島君」という呼びかけの言葉が字幕翻訳では丸ごと削除されている。このほか、話

の流れに不要なセリフが削除されていることが見て取れる。

4-2 失われた言語的要素の分類

前節の分析例で示したアノテーションについて、2人の分析者の意見が一致したものを対象に、Baker (2011) の5つの等価の枠組み（前掲表2）に沿って分類を試みた。分析の途中、フレーズレベルと文法レベルが区別がつきにくいこと、文体レベルが採り上げられていないことなど、Bakerの枠組みでは分類が難しことが分かった。そこで、分類枠の調整を行い、失われた言語要素を示す大枠として「語レベル」「文法レベル」「文体レベル」「談話レベル」「語用論レベル」を設定した。各カテゴリーごとに更に分類した結果を表3、4、5、6、7に示す。

表3は語レベルで削除されることの多かった言語的要素を整理したものである。語レベルでは「役職名」「固有名詞」「専門用語・業界用語」が削除されることが多く、この他「訳しにくいと思われる語彙」も削除される場合が散見された。表中の下線部は言語的要素が削除された部分である。語彙が全て削除される場合と一部だけ翻訳から落とされる場合があることがうかがえる。

表4のとおり、文法レベルで削除されることが多かったのは、副詞、副

表3 語レベルで失われた言語的要素

役職名	副総監
固有名詞	タカヒコスリーカントリークラグ 隣の勝どき署 (<u>their</u>) の管轄になるんじゃないか。 池上局長から私に「現地本部の本部長を降りろ」と。
専門用語・業界用語	ファー、ありゃ池だ。(ゴルフ) 署長の <u>接待</u> のお手伝い(ビジネス) 特捜本部の <u>予算</u> は所轄が出す決まりですからね。 <u>所轄</u> (<u>your</u>) は関係ないだろう。(警察)
訳しにくいと思われる言葉	所轄の <u>意地</u> みしてやりましょう。

表4 文法レベルで失われた言語的要素

連用修飾成分	空き地署は <u>ただちに</u> 帰れ スタート8時15分 <u>だから</u> 、遅れないように。
名詞修飾成分	本部から <u>警邏中の</u> 各局 港区朝霧台2丁目5番地4付近の路上で
不要な文・不要な表現	湾岸署の <u>者です</u> 。 君も <u>持ってよ</u> 。 <u>こちらです</u> 。

表5 文体レベルで失われた言語的要素

敬語表現（特に丁寧度、敬意の高い）	<u>お迎えに上がりました</u> <u>ゴルフへ参りましょう</u>
くだけた表現（音変化を含む）	<u>まだっすね</u> <u>ずるいっすよ</u> 、自分 <u>ばっか</u>

詞節などの「連用修飾成分」と名詞修飾節などの「名詞修飾成分」であた、話の流れに直接関わらない冗長的な情報や不要な部分が削除がされていた。また、重要度の低いセリフ、繰り返される言葉や表現、翻訳する必要のない部分などが「不要な文・不要な表現」として削除されていた。

文体レベルで削除された要素は、表5のとおり、「敬語表現」と「くだけた表現」に分類された。上下関係の厳しい警察を舞台とする映画なので、上司の階級によって普通の敬語だけではなく、かなり丁寧度の高い敬体の表現が頻繁に使用されたが、翻訳ではその表現やニュアンスは削除される場合が多かった。一方、同僚同士の会話や、先輩から後輩に対する言葉はかなりくだけた表現が使われていたが、これも翻訳に反映されていない場合が多かった。起点テキストの日本語では、文体だけで会話参加者の上下や親疎などの関係をつかむことができるが、字幕翻訳では情報が失われており、その含意をつかむことは非常に難しいと思われる。

今回の分析で最も削除されることが多かった言語的要素は、表6で示す

談話レベルのものであった。中でも「呼称・呼びかけ」の言葉は、全面的に削除されることが多く、削除されない場合は人称代名詞に変えられることが見て取れた。現場の刑事と上司、キャリアとノンキャリアという設定のこの映画では、年齢が上の人が若いキャリア官僚に丁寧度の高い敬語を使用する場面や、今は上司となっているキャリア官僚に対し、彼の新人時代の先輩だった主人公が、職場で呼び捨てで呼びかけたり、友だち口調で話す場面がある。人間関係が呼称によって示されているわけだが、この情報は翻訳では失われていることが多かった。また、「フィラー」や「間投詞・感動詞」、「話始めのマーカ―」「挨拶の表現」「感情の表現」など、コミュニケーションを円滑にするために重要だと思われる言語的要素も削除されていた。話の筋には直接かわらないという理由からかであろう。

語用論レベルでは、表7のとおり皮肉や冗談のニュアンス、また、ス

表6 談話レベルで失われた言語的要素

呼称・呼びかけ	青島君、ご挨拶なんかあとでいいから、～～署長、おめでとうございます、ブービー賞。 じゃあ、課長 (you) どうぞ。 和久さん、指導員の仕事はどう？ 魚住君と真下君から事情聴取！
フィラー	んー、腰痛てえしなあ。
間投詞・感動詞	いやいやもう砂にまみれた署長のお姿、素敵でしたよ。 えっ、いやあ、きれいなスモークボールじゃ… ほらほら、仕事戻って。 おいおい、分かってんのか？ <u>ったくもう。</u>
話始めのマーカ― (接続詞)	<u>それでは</u> 、第15回警視庁署長会のゴルフコンペを開始します。
挨拶の表現	操作講習終わりました。 <u>よろしく願います。</u> <u>すいません、失礼します。一歩下がってください。失礼します。</u> 警察： <u>お先に</u> 魚住係長代理： <u>お疲れ。</u>
感情の表現	わあ、 <u>すっごい。</u> こりゃ、おそろいで。 <u>いやたいしたもんですなあ。</u>

表7 語用論レベルで失われた言語的要素

皮肉・冗談	真下：この中で英語しゃべれるの雪乃さんだけだもんね。 署長： <u>イエス</u> 緒方警察官：お疲れ様です。 和久指導員： <u>疲れるほど働くな。</u>
スピーチレベルのシフト	青島：なんだよ、俺、忙しいんだけど。 すみれ：刑事課の窃盗事件のことなんだけど、 彼女たち… 青島： <u>どうされました。</u>

スピーチレベルのシフトがしばしば削除されていた。この映画では、ストーリー展開にはあまり関係しないが、話を面白くするための冗談や皮肉、自己アピールや感情を示すためのスピーチレベルのシフトが随所に含まれているが、これらの情報は、削除や言い換えによって字幕翻訳からは失われていた。

4-2 失われた社会・文化的要素

次に、言語的要素が削除されたことにより、どのような社会・文化的要素が失われたかについて検討を行った。その結果、接待や減給などの職場の慣習・制度、官僚と現場の刑事の格差、学歴や出世を重視する官僚たちの価値観、呼称が示す人間関係、犯人の家族関係、少年法とその報道の仕方など、映画の内容にも関わる社会・文化的な要素が失われていることが分かった。以下に、具体的な分析例を基にその様相を見てみる。

分析例3は、副総監をゴルフ接待する署長を手伝った青島刑事が、職場に戻ってきた時に同じ課の上司と話す場面である。「接待」「査問会」という言葉が削除されたために、署長とゴルフに行った本当の目的や、それが査問会での懲罰を軽減するためだったことが分からなくなっているが、社会文化的には、接待の習慣や懲罰制度に関する情報が失われたことになる。

【分析例 3：警察の慣習・制度〈接待、査問会〉】

□□は翻訳で削除・削減された部分

真下係長：先輩、いないと思ったら、ゴルフだったんですか？
 青島：署長の接待のお手伝い。
 魚住係長代理：結構なご身分だね。
 青島：冗談じゃないつすよ。査問会で3ヶ月減給になっちゃったでしょ。
 あれね、文句言わずに働いたら2ヶ月半にしてくれるって。

【分析例 4：官僚の世界・価値観〈学歴社会・学閥〉】

新城：池上局長から私に「現地本部の本部長を降りろ」と。
 室井：どういうことだ？
 新城：隠してもしようがない局長に言われました「ここのトップにいてミスがあつたら人生おしまいになる」と。私はこれ以上点数とらなくても上にいけます。長官が東大閥ですから。東北大でしたね、室井さんは。
 室井：そうだが。
 新城：この辺で手柄を立てといた方がいいんじゃないですか？
 室井：何が言いたい？
 新城：僕が言ってるんじゃない、局長が言ってるんです。
 室井：私に現地本部長になれと？
 新城：あなたのこれからのことを考えるとそうした方がいいんじゃないかな。
 …入試で遊ばず死ぬほど勉強しておいてよかった。

分析例 4 は、キャリア官僚の 2 人が副総監の誘拐事件の総括責任者のポストをめぐる話をしてしている場面である。日本語のセリフからは、職場に学閥というものがあり、官僚の出世においては大きな力を発揮すること、有力な学閥に所属しない場合は、危ない仕事で成果を上げなければならないこと、有力な学閥に入って楽に出世するためには少しでもいい大学に入る必要があること、そのために、努力を惜しまないことなど、日本の学歴社会の状況や官僚の価値観を読み取ることができる。しかし、字幕翻訳で「閥」が削除されたことにより、出世と出身大学が関連していることは読み取れても、その背景に学閥という存在があるという情報が失われてし

まっている。またこの場面では、新城は敬体で話し、室井は普通体を使っている。それはキャリア官僚であるこの2人が先輩後輩の関係であることを示すものである。日本語セリフには、削除の印は付いていないが、この文体レベルの情報が翻訳には反映されておらず、字幕翻訳の会話からは2人の詳しい関係性を読み取ることはむずかしい。

5. 考察

本研究では、映画「踊る大捜査線」を題材に、日本語の音声セリフと英語の字幕翻訳を比較分析して、①翻訳によって失われた言語的要素と②言語的要素が削除されたことにより失われた社会・文化的な要素について検討した。その結果、①については、語のレベルから談話、語用論までの各段階で削除される言語的要素が明らかになった。失われた情報は、話の流れやあらすじに直接かわるものは少なく、ストーリーの大筋の理解には問題のない範囲であった。したがって、字幕翻訳を使うことで、映画のストーリーを理解したり、楽しんだりすることは可能である。一方、コミュニケーションを円滑にし、人間関係の推測を助ける呼称や自己表現に必要な感情表現、話に面白さをもたらす冗談などの言語的要素は高い割合で失われていることが分かった。字幕翻訳の際の意味の取捨選択において人間関係をつなぐためのコミュニケーションに関わる言語的要素が落とされたということであるが、この点が、学習者が字幕を使っても一人では学べない部分だと言える。②については、映画の設定である警察や官僚組織に関する情報やその背景にある学歴社会や出世などに関する考え方や価値観が失われるほか、人間関係の保持に関わる情報が削られてしまうことも明らかになった。これは、字幕だけでは、社会文化的知識や社会言語的知識に気づくことができず、社会文化的能力や社会言語的能力を習得することが出来ないことを示すものである。

以上の結果から、字幕翻訳を使って自律的に映画に親しむ学習者が一人

では学べないことを整理すると、以下のようなものが挙げられる。

- ・登場人物の言葉遣いから人間関係つかむこと
- ・「呼称」から登場人物の人間関係を理解すること
- ・登場人物の感情を理解すること
- ・冗談や皮肉を理解すること
- ・ストーリーの背景となる社会制度や慣習を理解すること
- ・ストーリーの背景にある考え方や価値観を理解すること

言語教師が映画を使って教室でできることとは、本研究で浮かび上がったこれらの事項を学習目標として採り上げ、学習者が言葉と文化を学んでいけるような授業をデザインすることだと言える。

ここに掲げた学習目標には、知識を正解として提示したり、正解を求めるような授業は馴染まないだろう。なぜなら、それぞれの目標には解釈が伴うからである。例えば、同じ場面を見ても、登場人物の感情の解釈は人によって異なる場合がある。また、同じセリフを聞きとって背景にある社会の価値観を探る場合も、聞き手の知識や経験によって解釈は異なってくるだろう。このような場合、お互いの解釈を披瀝し、お互いの解釈の違いを理解して、解釈のズレについて意見を交換しながら、お互いに納得のできる解釈に辿り着けるような授業デザインが相応しいと考える。そこでは、言葉の力は不可欠である。他者に自分の考えを正確に伝えるための言語能力、他者の考えを正確に聞いて理解するための言語能力、他者と論理的に意見を交わす言語能力。字幕翻訳を使って一人で学んできた学習者に対して、学習者同士が相互交渉をしながらこれらの能力を涵養していけるような学習環境をデザインすること、これが言語教師が教室で出来ることではないかと考える。

本稿では、1本の映画の字幕翻訳の分析から、映画を使って教室でできる言語教育について考え、授業のデザインを考察した。この授業デザインを実践すること、そして、本稿での分析の結果が他の映像作品にも当てはまるかどうかを検討することが今後の課題である。

注

- 1) 「文化」の定義は百花繚乱で、文化的所産から集団類型的なもの、個人の経験の総体を指すという考え方まで多種多様で、定説はない。本稿では、異文化化間コミュニケーション教育や言語教育の枠組みとして使用される Bennett (1998) を基に、歴史や政治、音学など客観的なものを指す Big “C” Culture と、行動や信念、価値観など主観的なものを指す small “c” culture の総体を指すものとして「文化」という言葉を使用する。また、「文化」を国家や民族などに固定された静的なものとしてではなく、相互に往還して変容する流動的なものと捉える立場に立つ。
- 2) 「アニメ」という言葉は、日本では「アニメーション」の略語として、国内外のアニメーション全般を指すものとして認識されている。しかし、世界的には「ANIME: アニメ」は日本的な表現様式を備えた日本製アニメーションのみを指す言葉として用いられており、「ANIMATION: アニメーション」と区別される。ここでは、日本製アニメという意味で使用している。

参考文献

- 河原清志 (2011) 「翻訳とは何か―研究としての翻訳 (その 12)」『翻訳通信』 2011 年 8 月号 第 2 期 111 号、pp. 8-15
- 小谷康子 (2004) 「日本映画における英・仏・伊の文化認識の相違がもたらす字幕のずれ―文化的視点による字幕分類モデルの提示―」『通訳研究』 (4)、pp. 103-120、日本通訳学会
- 清水俊二著 戸田奈津子、上野たま子編 (1992) 『映画字幕は翻訳ではない』 早川書房
- 染谷泰正 (2009) 「大学における「字幕翻訳」授業のための指導モデル～理論と実践の両面から～」日本通訳翻訳学会第 10 回大会 発表資料 (http://someya-net.com/84-Subtitle_TeachingModel/Jimaku_Handout_TsuyakuGakkai09.pdf 2016 年 1 月 8 日閲覧)
- 藤濤文子 (2007) 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション―機能主義的翻訳理論の諸相』 松籟社
- ピム, A. 著 武田珂代子訳 (2010) 『翻訳理論の探求』 みすず書房
- ベイカー, M. & サルダーニャ, G. 編集 藤濤文子監訳 (2013) 『翻訳研究のキーワード』 研究社
- Bennett, M. J. (1998) Intercultural Communication: A Current Perspective. In Bennett, M. J. (ed.) Basic.
- 牧野成一 (2014) 「翻訳法の復権をめざして」『日本語教育の新しい地平を開く 牧野成一教授体感記念論集』、pp. 131-145、ひつじ書房